

アジアの民族服に関する被服造形学的研究

——文化学園服飾博物館所蔵品の分析調査(4)——

荒井 や よ い* 田 村 照 子**

A Study on Clothing Construction of Ethnic Costumes in Asia

——An Analysis of the Collection of Bunka Gakuen Costume Museum (4)——

Yayoi Arai and Teruko Tamura

要 旨 文化学園服飾博物館所蔵のアジアの民族服について実物資料の継続調査を行った。前開き長衣（カフタン型）14点①西アジア、アラブ地域のクンバズ、パレスチナ地域のドゥラー、シリア、イラク、トルコのコート、アフガニスタンのドン、②中央アジア、ウズベキスタンのムルサク、ハラト、トルクメニスタンのコート、③南アジア、ブータンのゴ、④東アジア、中国の蟒袍、各資料の形状、パターン、縫製方法、装飾技法、裏側の処理について調査し、ボディー着装での衿ぐりのフィット性、シルエットの観察を行った。各資料の素材は絹6点。経糸絹、緯糸綿3点。綿3点。麻、毛各1点。縫製は手縫い11点。ミシン縫い1点。併用2点であった。開口部の縁飾りは12点に見られ魔除の目的で施されているが、装飾、補強、保形の役目も果たす。裏は半裏1点、身頃のみ裏付き2点、裏打ち2点、総裏9点内2点は綿入れ。開口部裏側に別布見返しを付け縁飾りとする仕立てが特徴的で8点に見られた。シリアの2点は着装時前裾を帯に挟み、裏側の縁飾りを見せるものであり、この着装法により機能性が増す。トルクメニスタンのものは緻密な刺繍で補強し再利用出来る縫製法が確認できた。アジアの民族服は機能性への工夫がありデザイン性に優れる。

キーワード 民族服 (ethnic costumes) アジア (asia) 前開き (open front)

I は じ め に

民族服飾は地域の生活環境、気候、生活文化により様々な形状に分化している。小川安朗氏はこれらの民族服飾をその型式により分類して、腰布型、巻垂型、貫頭型、前開型、体形型の5種に区別した。前開型は前割れ、前合わせ、帯締め型を原則とする上下連続衣である。カフタン型との名称もある。トルコのカフタン (caftan, kaftan) に由来する。体形型の服装を

ヨーロッパ系とするのに対し、前開型はアジア系ともいえる。前開型の裁断は直線裁ちで平面構成である。衿、裾をつけるものがある。袖は筒袖が多く、衿仕立て（裏付き）が多い。着装は前合わせに着装して帯を締めるもの、帯を締めないではおるものの2種に大別される。民族服飾の美しさ、機能性への工夫、手仕事の見事さを再度確認したく本研究は前報に引き続き、文化学園服飾博物館所蔵品の分析調査を行うおうとするものである。本報では前割れ、前合わせのアジア系といわれる前開き形状のものを選んだ。調査対象とした民族服は前開き型長衣14点。西アジア9点、中央アジア3点、南アジア、東アジア各1点で、その素材、形状、

* 本学教授 被服構成学

** 本学教授 被服衛生学

パターン、縫製方法、装飾技法、裏側の処理。ボディー着装での衿ぐりのフィット性、シルエットについて被服造形学の視点からの考察を試みた。

Ⅱ 研究 方 法

1. 調査対象

調査した実物資料は、文化学園服飾博物館収蔵品データベースを用いてアジアの民族服の中より前開き長衣（カフタン型）14点を選んだ。資料1：アラブ地域・男子コート・クンバズ（20世紀前半）、資料2：パレスチナ地域・女子コート・クンバズ（1930年代）、資料3：パレスチナ地域・女子コート・ドゥラー（1880年代）、資料4：シリア・女子コート（1920年頃）、資料5：シリア・女子コート（20世紀前半）、資料6：シリア・女子コート（1880-1890年）、資料7：イラク・女子コート（1950-1970年代）、資料8：トルコ・女子コート・ウチュテック・アンテリ（19世紀末-20世紀初め）、資料9：アフガニスタン・男子コート・ドン（20世紀後半）、資料10：ウズベキスタン・女子コート・ムルサク（20世紀初め）、資料11：ウズベキスタン・男子コート・ハラト（20世紀初め）、資料12：トルクメニスタン・女子コート（20世紀）、資料13：ブータン・男子長衣・ゴ（20世紀初期-中期）、資料14：中国・男子長衣・蟒袍・マンパオ（清朝末期・19世紀末-20世紀初め）である。

調査は素材、形状、パターン、縫製方法、装飾技法、裏側の処理について行った。

(1) 素材

資料の織組織、糸密度（たて×よこ本/cm）は組織鏡にて観察、計測した。厚さ（mm）の測定にはスプリングマイクロメーターを使用した。重量は衣服の全体重量を計測、素材（材質）については博物館作成のデータを使用した。

(2) 形状、パターン

各資料の形状、構成、特徴を観察した後、そ

の構成パターンの分析を行った。資料全体の外形を把握するため、テープメジャーを使用し、着丈、衿丈、胸幅、裾幅の4箇所を計測。次に、各構成パーツのパターン採取のため、パーツを平面に付置し、その形状を写し取ると共に要所を採寸した。資料の構成線を詳細に計測記録し、その数値で作図を起こし、パターン作製を行った。左右の寸法が異なる場合は調整を行った。

(3) 縫製方法、装飾技法、裏側の処理

資料の中に使用されている全ての縫製部分並びに装飾部分を対象とし、縫製方法、装飾技法、裏側の処理を観察、調査し記録した。

(4) ボディー着装による観察

ボディーへの着装状態で、衿ぐりのフィット性、シルエット形状を観察し記録した。

Ⅲ 結果及び考察

1. 素材

資料1～14までの資料の諸元を表1に示す。

(1) 資料1 アラブ地域の男子コート、クンバズ（図1）の表布は、経糸に絹、緯糸に綿を用い縦縞に織られたシリア製の紋織で光沢がある。裏布は半裏で綿の平織を上身頃と袖に付けて補強、防汚の役目をする。前端から裾に絹の縹子織の見返しが装飾的につけられ、張りとうみ加わり開口部が落ち着く。縹子織は摩擦抵抗が少なく、歩行での裾のまつわりつきが減少すると思われる。裏側の一部を図16に示す。

(2) 資料2 パレスチナ地域女子コート、クンバズ（図2）の表布は絹100%の紋織で光沢がある。1930年代に普及した紡績機と織機で織られた明るい縹模様でシリア産のアトラスの生地である。裏布は綿の綾織で表布をしっかりと支え保温、補強の役目をする。明るい色の表布に対比し裏布はモスグリーンを配している。

(3) 資料3 パレスチナ地域的女子コート、ドゥラー（図3）の表布は綿100%で平織。織が粗く硬い手織り布である。肌の触れる立衿には肌触りの良いアトラス（経糸は絹、緯糸は綿）

を用いている。身頃は表布の赤錆色と藍色を2枚重ねて破線模様の刺繍で表裏を留めている。地厚な布の2枚重ねは、衣服をしっかりとさせ堅牢度を増すが、重くなる。衣服重量は調査資料中2番目に重く1,421gある。

(4) 資料4 シリア女子コート(図4)の表布は麻100%の濃紺の無地。背裏にも表布を使用し身頃はしっかりする。衣服重量は1,272gでやや重い。前端、裾、スリット、袖口の見返しに明るい色使いの経緋、縞柄の襦子織(アトラス)を三角形で繋ぎ合わせて使い、華やかなアップリケの装飾となっている。すべりの良い素材は裾さばきを助ける。

表1 資料の諸元

資料	地域/国/衣服種名称	部位	素材(%)	織組織	糸密度(本/cm)たて×よこ	厚さ(mm)	衣服重量(g)
1	アラブ地域男子コート クンバズ	表布	経糸:絹 緯糸:綿	綾織	70×23	0.42	1,032
		裏布	綿 100	平織	15×13	0.43	
		見返し布	絹 100	縞子織	50×13		
2	パレスチナ地域女子コート クンバズ	表布	絹 100	綾織	75×20	0.98	825
		裏布	綿 100	綾織	13×13		
		見返し布	綿 100	平織	15×13		
3	パレスチナ地域女子コート ドゥラー	表布	綿 100	平織	15×10	1.77	1,421
		裏打ち布	綿 100	平織	13×10		
		見返し布	綿 100	平織	15×13		
4	シリア女子コート	表布	麻 100	平織	15×13	1.89	1,272
		裏打ち布	麻 100	平織	15×13		
		見返し布	経糸:絹 緯糸:綿	縞子織	75×23		
5	シリア女子コート	表布	綿 100	平織	13×13	1.09	1,087
		裏布	綿 100	平織	30×28		
		見返し布	綿 100	平織	30×30		
6	シリア女子コート	表布	絹 100	綾織	40×35	1.62 織入れ 綿・裏打ち布	1,408
		裏布	絹 100	平織	60×60		
		見返し布	絹 100	綾織	55×20		
7	イラク女子コート	表布	綿 100	綾織	35×30	0.89	691
		裏打ち布	綿 100	平織	20×20		
8	トルコ女子コート ウチュテック・ アンタリ	表布	絹 100	通し絵緯綾織	45×15	0.75	776
		裏布	綿 100	平織	30×30		
		見返し布	綿 100	平織	20×15		
9	アフガニスタン男子コート ドン (チャパン)	表布	経糸:絹 緯糸:綿	綾織	60×20	0.79	953
		裏布	綿 100	平織	25×20		
		見返し布	綿 100	添毛			
10	ウズベキスタン女子コート ムルサク	表布	経糸:絹 緯糸:綿	平織	55×20	1.19 織入れ 綿・裏打ち布	816
		裏布	綿 100	綾織	25×20		
		見返し布	綿 100	平織	45×35		
11	ウズベキスタン男子コート ハラト	表布	絹 100	綾織	30×23	0.54	834
		身頃裏布	絹 100	平織	50×25		
		袖裏布	綿 100	平織	25×20		
12	トルクメニスタン女子コート	表布	毛 100	平織	18×15	1.52	1,338
		裏布	綿 100	平織	25×25		
		見返し布	経糸:絹 緯糸:綿	平織	75×15		
13	ブータン男子長衣 ゴ	表布	絹 100	経浮綾織	18×10	1.53	2,980
		裏布	綿 100	綾織	25×20		
		見返し布	綿 100	平織	50×28		
14	中国男子長衣 縞袴 マンバオ	表布	絹 100	綾織	25×30	0.34	775
		裏布	絹 100	平織	55×38		
		見返し布	絹 100	縞子織	90×30		
参考	日本女子半長着 浴衣	表布	綿 100	平織	30×25	0.38	493
		肩当	綿 100	平織	15×15	0.43	

(5) 資料5 シリア女子コート(図5)表布は綿100%。平織で硬く、やや重い。コーティング加工がされ、裾に絞り染めが施されている。裏布は綿の平織を使用して保温、補強する。見返しにはコーティングし少し艶のある綿の平織を使用。コーティングはほつれを止め細かな図柄でのアップリケの手仕事をし易くする。

(6) 資料6 シリア女子コート(図6)の表布は絹100%の綾織で光沢があり金糸のチェーン・ステッチでのチューリップ文刺繍が繊細で華やかである。裏布は薄地の絹を使用している。裏布衿ぐりは磨耗、風化で朽ち落ち、縫い端は擦り切れが見られる。薄く綿が張られ、裏打ち布が当てられ、ほんのり厚みが加わった綿入れのコートは手触りも良く温もりを感じる。表布のブルーに対し、裏布の赤が印象的である。

(7) 資料7 イラク女子コート(図7)の表布は綿100%の綾織で光沢がある。裏側に綿の平織を使用。裏打ち布として表との2枚合わせて粗い針目の刺繍がされ補強の役目も持つ。裏側のすくい目はそのまま見せている。裾模様の刺繍の分量から重量はややあるかと予測したが、衣服重量は691gで、調査資料中最も軽くブータンのゴ(約3kg)の1/4以下の重量であった。

(8) 資料8 トルコ女子コート、ウチュテック・アンテリ(図8)表布は通し絵緯綾織、縫取織で華麗な花模様を織り出している。金属糸を使用。裏布は生成りの綿の平織で表の補強をする。袖口見返しは少し毛羽立った綿の縞柄を使用。開口部の銀糸のコードを使用した弧と三角の連続縁飾りの不安定な形状を金属糸がしっかり保形している。衣服重量は776gであった。

(9) 資料9 アフガニスタンの男子コート、ドン(図9)の表布は経糸に絹、緯糸に綿の綾織。緑と紫の縞柄で光沢がある。裏布は綿の平織で保温、補強、装飾の役目を果たす。衿、前端、裾、スリットの見返しには添毛素材のコーデュロイをバイアス布目で使用し、装飾効果もある。

(10) 資料10 ウズベキスタン女子コート、

表2 資料の概要

資料	国名/地域	分類	名称	世紀/年代	素材	文様	着丈 (cm)	裾 (cm)	後ろ裾幅 (cm)	重量 (g)	衿	スリット (cm)	着装方式			裏布	縫製	装飾
													含むせ着	はおり着	前裾上げ			
1	アラブ地域	男子服	コート クンバズ	20C前半	経糸:絹 緯糸:綿	織	146	83.5	58	1,032	立衿	脇 19.5 袖下 10				半裏	ミシン縫い	縁飾り
2	パレスチナ 地域	女子服	コート クンバズ	1930年代	絹	織	134	75	74	825	立衿	脇 25 袖下4.5	前にボタン ループどめ			総裏	手縫い	縁飾り アププリケ
3	パレスチナ 地域	女子服	コート ドゥラー	1880年代	綿		134	48.5	56	1,421	立衿	なし		はおり着		身頃裏付 袖裏無し	手縫い	縁飾り 刺繍
4	シリア	女子服	コート	1920年頃	麻		135	74	56	1,272	立衿	脇 46			前裾上げ 帯に挟む	HLまで 裏打ち	手縫い	縁飾り 刺繍 アププリケ
5	西 アジ ア	シリア	女子服	コート	20C前半	綿	123.5	59	69	1,087	立衿	脇 23.5			前裾上げ 帯に挟む	総裏	手縫い	縁飾り 刺繍 アププリケ 絞り染
6	シリア	女子服	コート	1880- 1890年	絹	花	135	92	106	1,408	衿なし	脇 42 袖下32	前にボタン ループどめ			総裏 綿入れ	手縫い	縁飾り 刺繍 装飾テープ
7	イラク ガラコチ	女子服	コート	1950- 1970年代	綿		126	56	56	691	立衿	脇 31 袖下17		はおり着		裏打ち	手縫い	刺繍
8	トルコ	女子服	コート カサマツカ アツカ	19C末- 20C初め	絹	花	138	87	60	776	立衿	脇 89 袖下27	前にボタン ループどめ		前裾上げ 脇ボタンに	総裏	手縫い	縁飾り 刺繍
9	アフガニ スタン	男子服	コート ドン (チャパン)	20C後半	経糸:絹 緯糸:綿	織	116	124	63.5	953	和服風衿	脇 17		はおり着		総裏	ミシン縫い	縁飾り ミシン刺繍
10	ウズベキ スタン	女子服	コート ムルサク	20C初め	経糸:絹 緯糸:綿	ハバ メット	126	78	96	816	衿なし	脇 15		はおり着		総裏 綿入れ	手縫い	刺繍の縁飾り キルティング
11	ウズベキ スタン	男子服	コート ハラト	20C初め	絹	格子	137.5	110	104	834	ヘチマ カラー	脇 10	左衽 前に紐			総裏	ミシン縫い 手縫い	刺繍の縁飾り
12	トルクメニ スタン	女子服	コート	20C	毛		116	86	78	1,338	半纏風衿	脇 27		はおり着		身頃裏付 袖裏無し	手縫い	刺繍の縁飾り 刺繍
13	南 ブータン	男子服	長衣 ゴ	20C初期 -中期	絹	格子	134	94	114	2,980	ヘチマ カラー	なし	右衽 脇に紐			総裏	手縫い	
14	東 アジ ア	中国	長衣 蟒袍 マンパオ	清朝末期 19C末- 20C初め	絹	龍	134	104	112	775	衿なし	前後中心 55	右衽 脇にボタン ループどめ			総裏	手縫い	布縁飾り 刺繍 装飾テープ
参考	日本	女子服	単長着 浴衣	20C中頃	綿		153	61	59	493	撥衿	なし	右衽			肩当 屋敷当	手縫い	

ムルサク（図10）の表布は経糸に絹、緯糸に綿で織った経緋で光沢がある。パルメットと呼ばれる植物文様が配されている。鮮やかな色彩と大胆な文様のアドラスはウズベキスタンでは良く知られた布である。身頃裏布はロシア更紗、袖裏布は生成り木綿を使用して装飾、保温、補強する。見返しは縦縞柄をバイアスに使い、なじみをよくすると同時に柄いきを楽しむ。縁飾りは藍と白の平紐を配する。綿入れてである。

(11) 資料11 ウズベキスタン男子コート、ハラト（図11）の表布は絹100%の経緋織、サマルカンド、プラハの代表的染織品である。段模様は男性用によくみられる。身頃裏布は絹の平織で装飾、保温を袖は綿で補強の役目を果たす。表布はグリーン裏布はピンクを配している。

(12) 資料12 トルクメニスタン女子コート（図12）の表布は毛100%，赤の羅紗地。身頃裏地はロシア更紗、袖は裏無し。見返しは経緋（アドラス）をバイアス裁ちで使用。衿、前端、

裾、スリット、袖口にはチェーン・ステッチで帯状に刺繍した別布（赤の羅紗地）が切替えられついている。切替えることで刺繍は刺し易く、刺繍部分の再利用もし易くなる。

(13) 資料13 ブータン男子長衣ゴ（図13）の表布は絹100%，経浮紋織（経糸を浮かせて文様を表す）で縦縞模様の布。野蚕から取った袖糸を使い織られている。地厚だが柔らかな風合い。裏布はしっかりした綾織で、補強、保温の役目をする。開口部に綿のバイアス地の見返しが付く。衣服重量は調査資料中、最も重く2,980 gあり、ずっしりと重く防寒の目的を持つ。

(14) 資料14 中国、男子長衣、蟒袍マンパオ（図14）の表布は綴織。龍の文様を施している。階級により色、文様が決められている。裏布は薄手の絹地で装飾性、着心地感を高める。衿仕立てになっている。春秋用であり、衣服重量は775 gで調査資料中2番目に軽い。

自然から得られる動植物繊維を素材とし織られた絹、綿、麻、毛の布が使われ、気候風土、

労働作業，生活様式に合ったデザインの衣服構成に適合した素材が使用されている。コートでの裏布の役目は保温，補強，防汚，美観，装飾等が挙げられる。民族服での裏布の役目は保温，補強が第一で，次に美観，装飾が考えられる。気温の急激な変化は冬期のみならず夏期にも見られるため，綿入れや毛皮の外衣などの暖かい衣服が必要である。綿入れは2点あった。別布のバイアス地を見返しに使用し，開口部を縁取る裏側が特徴的であることが確認でき，8点に見られた。縹子織の見返し布は光沢とすべりのよさが装飾と機能を兼ね3点に見られた。

2. 形状，パターン，縫製方法，装飾技法

(1) 資料1 アラブ地域；男子コート・クンバズ (図1)

クンバズはトルコの筒袖付き前開き型長衣で19世紀末からアラブ人男性がソブ（貫頭型長衣）とアバ（矩形の外衣）の間に着るようになった。前身頃，後ろ身頃，脇，衿，袖，裾からなる。前の合わせは左衽である。2 cm 幅の立衿が前で7 cm 重なり，衿についた2個のボタンで留める。袖下に10 cm，脇に19.5 cmのスリットがあく。袖下スリットは袖口を折り返し易く，脇スリットは歩行を容易にする。民族服でのスリットは本来，騎馬のためにあけられた。

縫製は全てミシン縫い。縫い合わせ縫い代を折伏せにし，それぞれの縫い代を抱かせ3 cm 間12針の針目でミシンステッチがかかる。布4枚でミシンがかけられ，丈夫である。装飾は開口部に付けられたコードの縁飾り。表衿，前端，スリット，袖口の開口部に0.2 cm 幅のコードが2本縫い止められている。裏側は前端5～7 cm 幅，スリット3 cm 幅，前裾角は三角形にサテンの見返しが出来上がりに折られミシンステッチで押えられる。しっかりとした見返し布が前端を安定させる。裏側には綿の半裏が付き保温，補強，防汚の役目を果たす。資料の概要を表2に，衿，縁飾りを図15に示す。

(2) 資料2 パレスチナ地域；女子コート・クンバズ (図2)

ガリラヤとナーブルス地方で，細身で袖の短いコートに代わり19世紀後期より着用されるようになった。明るい色の縞や模様のあるシリア産のアトラスで作られる。前中心の3個のボタンは，縁飾りのコードで作られたループで，右衽合わせに留められる。1.5 cm 幅の立衿，筒袖の付いたコート。袖下4.5 cm，脇25 cmのスリットがあき，トルコ風のスタイルである。前後身頃(前後を続けて裁つ)，脇，衿，袖，裾からなる。

縫製は全て手縫いである。衿は表身頃をのせ押え縫いでつけ，裏身頃はまつり縫いでとめ

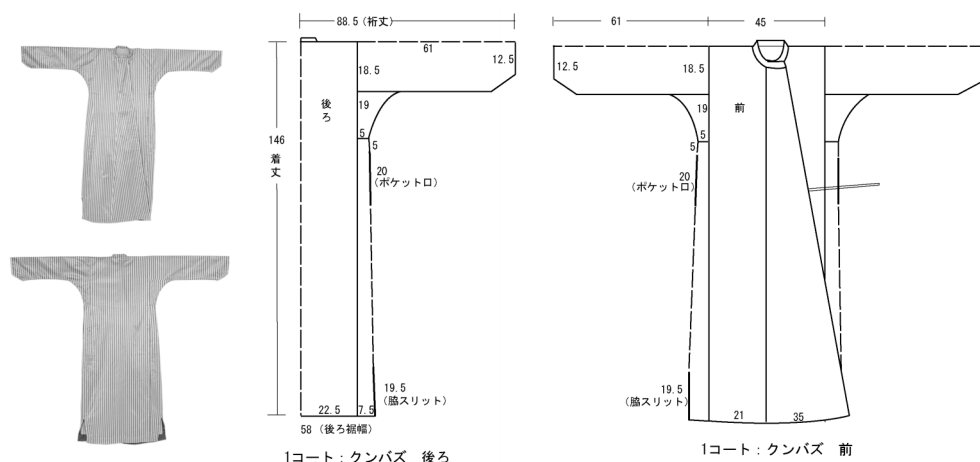


図1 資料1 アラブ地域 (文化学園服飾博物館所蔵)

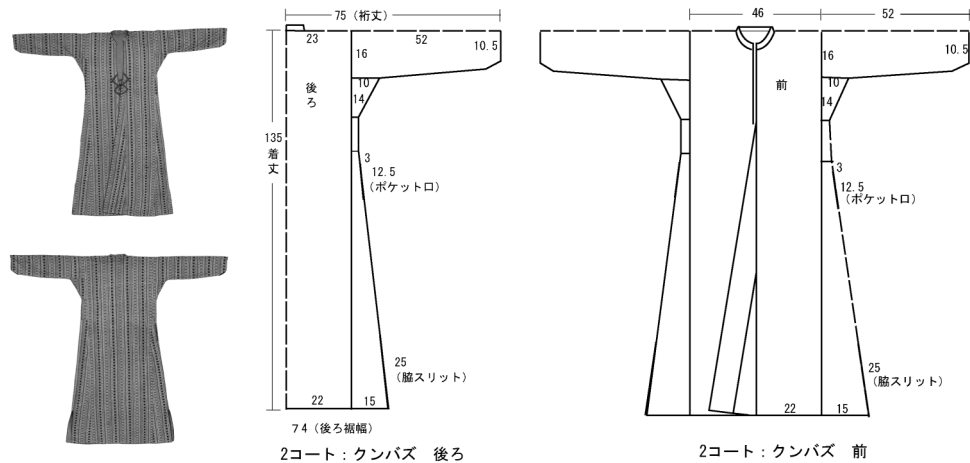


図2 資料2 パレスチナ地域 (文化学園服飾博物館所蔵)

る。総裏の袷仕立てで表と裏をハンドステッチでとじ合わせる。装飾は開口部の縁飾り。衿、前端、裾、スリット、袖口に0.2 cm 幅のコードが細かい針目でかがりつけられる。ボタン位置には1.2幅のメリヤス地を山形に配したアップリケがかがりつけられ、ワンポイントとなっている。

(3) 資料3 パレスチナ地域；女子コート・ドゥラー (図3)

前開きで丈が長く袖の短い立衿のついたコート。全体に細身で後ろ衿ぐりは肩山より前に位置する。ガリラヤ地方で第1次大戦前まで着用されていた。前後身頃(前後は続けて裁つ)、

脇、衽、衿、袖、裾からなる。前端を突合せに着装する。2.5 cm 幅の立衿がつく。絹の2色のコードで前衿端、前端、前裾端を飾る。胸元と前裾は2色のコードを交互にスカラップに作り飾りつけている。

裏側は身頃に藍木綿の裏布をつけて、縦に破線模様を刺繍糸で刺し表裏をとじ合わせる。衽を縫い合わせ、片返した縫代を細かい針目のバックステッチで押え同時に飾り縫いとしている。脇の縫目線をクロスステッチの飾り縫いで隠す。縫製は全て手縫い。厚みのある硬い素材の縫い合わせは一針抜きの作業となるため時間がかかる。細かい針目で根気よく丁寧に製作さ

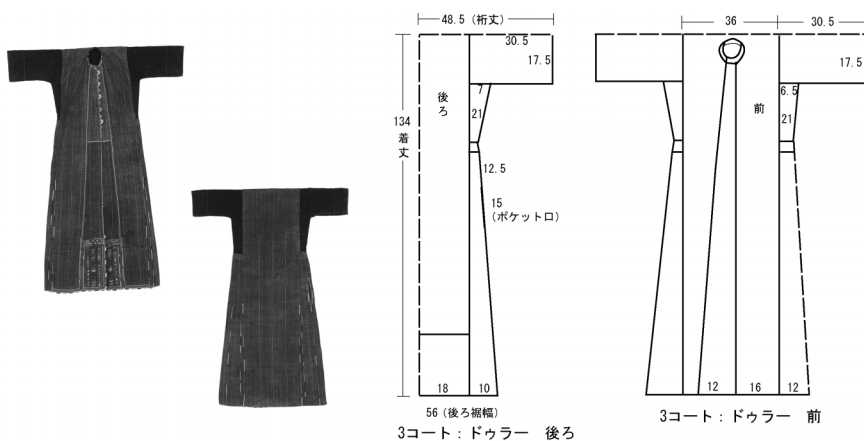


図3 資料3 パレスチナ地域 (文化学園服飾博物館所蔵)

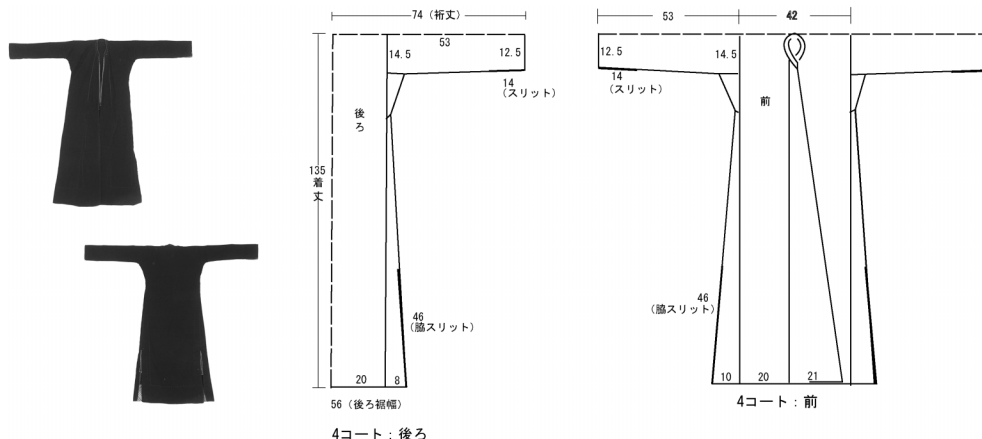


図4 資料4 シリア (文化学園服飾博物館所蔵)

れている。装飾は衿、前端、前裾へのコードのスカラップの縁飾り。前裾のパネルに刺されたクロスステッチの刺繍。表布と裏布を合わせて刺された縦縞をなすステッチ。地厚な布地に刺された細かな針目のバックステッチの刺繍。どれも大変な作業時間を要すると推察される。

(4) 資料4 シリア；女子コート (図4)

前裾を帯に挟み裏側が見えるように着装するため裏側の縁に装飾が施される。経緋や縞柄の縹子織布アトラスが三角形で複数接ぎ合わされることで、より華やかになっている。(図16) 表裏の対比に創作力の豊かさを感じる。どんな小さな布も捨てず活用する。調査資料では1 cm 四方の布片使用が記録されている。布を大

切にし、つぎはぎを多く作ったりパッチワークをするのは多産を祈る為でもある。前後身頃(前後を続けて裁つ)脇、裾、衿、袖、裾からなる。1.2 cm 幅の立衿がつき脇に46 cmのスリットがあく。衿、前端上部、スリット上部に3色のコードの縁飾りが直線と波状につけられる。

縫製は全て手縫い。3 cm 間11針のハンドステッチで縫い合わす。裏側は肩からヒップラインまで裏布がつき、硬く、堅牢になる。裏側前端、裾、スリットに華やかに装飾布がアップリケされる。裏側の脇縫い目を隠す小さな山型にカットされた飾り布が細かな針目で丁寧にまつられている。縞柄をバイアスに使い無数に接ぐことで見事な色彩効果を出している。装飾は

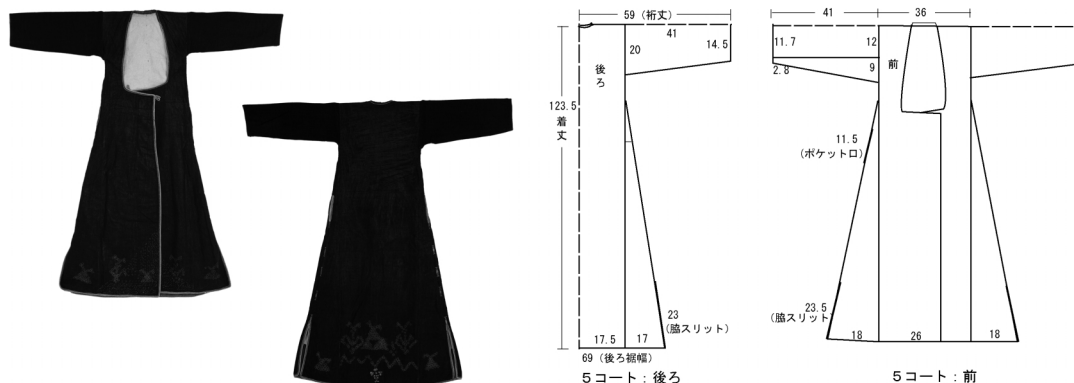


図5 資料5 シリア (文化学園服飾博物館所蔵)

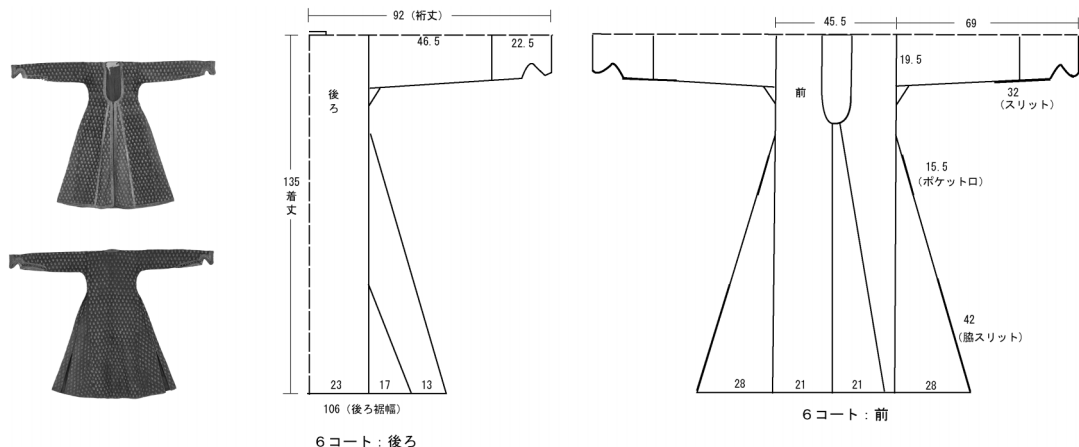


図6 資料6 シリア (文化学園服飾博物館所蔵)

コードの縁飾り。縫代を押える線状の刺繍。裏側の華やかなアップリケ。斬新なデザインに圧倒される。裏は派手だが表を地味にする。これは邪視を避けるためとも考えられる。

(5) 資料5 シリア；女子コート (図5)

衿ぐりがアンダーバストまで深く楕円にカットされている。衿元の形状からイスラム教一宗派、ドゥルーズ派教徒のものと考えられる。着装では前裾を持ち上げて帯に挟み、裏側の裾部分に施したアップリケが見えるようにする。前身頃、後ろ身頃、脇、袖からなる。0.9 cm 幅の立衿がつき、脇に 23.5 cm のスリットがあく。

縫製は全て手縫い。返し縫いで縫い合わされ縫代は割る。表布、裏布の2枚の布を1枚として製作する裏打ち仕立ての方法で縫われている。衿の裏の始末は表裏布共、出来上りに折り、次に別バイアス布をのせ、つける。この仕立ては芯を入れた状態と同様になり、開口部は布地を3枚重ねることで厚みと張りを増し形状が安定する。更に端には縁飾りがのせられ縫代を含めると7層の重ねになり端をしっかり保形する。表裏のとはじは10 cm 前後の間隔ではいる。衿ぐり、前端、裾、スリットに0.2 cm のコード2本がつき、コードに平行に刺繍が刺される。開口部裏側にはブルーの見返しがつく。接ぎ合わせが多く別布も使われる。前裾角の繊細な柄のアップリケは左右のデザインを

変えて細かく丁寧にまつられていて美しい。

(6) 資料6 シリア；女子コート (図6)

都市の上流階級の女性用コート。チューリップ文、U型にあいた衿ぐり、袖口のあきとボタンは支配したオスマン・トルコの服飾の影響である。5枚の花びらは護符の意味を持つファーティマの手も表現している。前後身頃（前後を続けて裁つ）、脇、裾、衿、袖、裾からなる。前中心に3個のボタンがつきコードループで留められる。脇に42 cm、袖下に32 cm のスリットがあく。金のテープが衿ぐり、前端、裾、裾つけ位置につき豪華さを感じさせる。

縫製は全て手縫い。細かな針目で縫い合わされ、縫代は割る。丁寧^{わた}に仕立てられている。表布、綿、木綿布、絹裏布が重ねられた綿入れである。絹裏布は裾部分を2枚重ねて、透けるのを防ぎ、補強も兼ねる。裏布は繊細な絹で磨耗と風化で擦り切れが目立つ。調査ではより慎重、丁寧な扱いが要求された貴重な資料である。

(7) 資料7 イラク；女子コート (図7)

北部のキリスト教徒が住む村、ガラコチ上層階級の晴れ着である。裾いっぱい^{わた}の刺繍が素朴で美しい。前後身頃（前後を続けて裁つ）、脇、裾、衿、袖、裾からなる。1 cm 幅の立衿がつく。袖下に17 cm、脇に31 cm のスリットがあく。

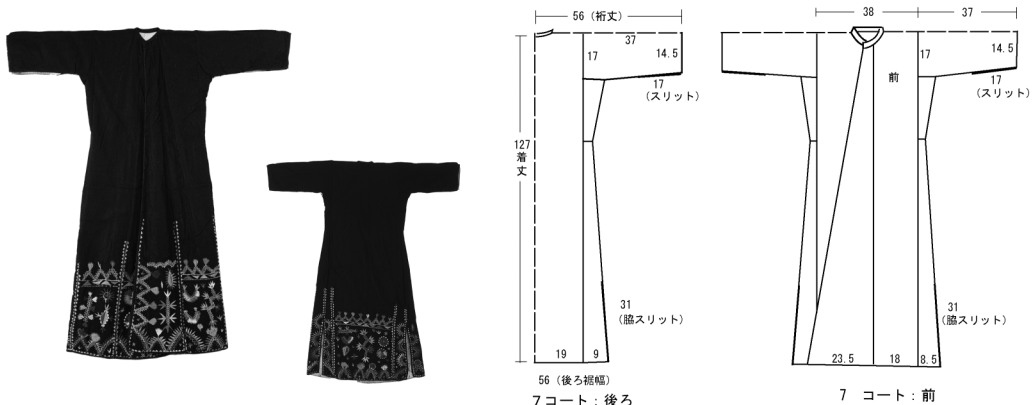


図7 資料7イラク（文化学園服飾博物館所蔵）

縫製は全て手縫い。黒糸2本取りで並縫い、縫代は片返し。裏側は生成りの綿を衿仕立てにして、前端、裾、スリットの開口部は表裏を黒糸でとじ合わせたら、端を出来上りに折り整えて赤の刺繍糸のステッチ飾りで表裏を止める。返し縫いのため糸引きで縫い縮みが生じている。表裏を合わせた後、前後の裾40～50cm いっぱいに大地に咲く小さな花々を粗い針目で刺している。黒地に多色使いの刺繍の裾模様が見える。裏側に刺繍の刺し糸が見え、手作りの温かみを感じる。袖下縫目がはつれている。

(8) 資料8 トルコ；女子コート・ウチュテック・アンタリ（図8）

晴れ着のコート、アンタリは前開きで、両脇

が深くあき、着装では前裾を上げ脇のボタンに留める。袖下も大きくあく。華麗な刺繍の花模様と開口部の銀糸での弧と三角の縁飾りが華やかで美しい。前後身頃（前後を続けて裁つ）、脇、衿、袖、裾からなる。左前身頃裏側ウエスト位置に2個の糸ループがつき、右前身頃にボタン位置の痕跡も残っており、右衿であることがわかった。2.4cm 幅の立衿がつく。袖下に27cm、脇に89cmのスリットがあく。前端、裾、袖、スリットに銀糸を用いて弧と三角が交互に連続するラインを縁取り、衿は直線に縁取る。

縫製は全て手縫い。表布の縫い合わせは黒糸で並縫いし、縫代は片返し。裏布は白糸で並縫

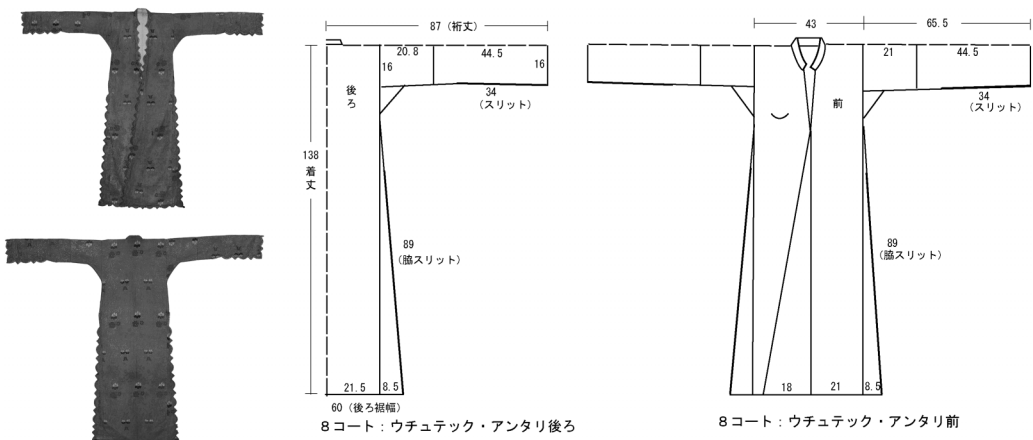


図8 資料8トルコ（文化学園服飾博物館所蔵）

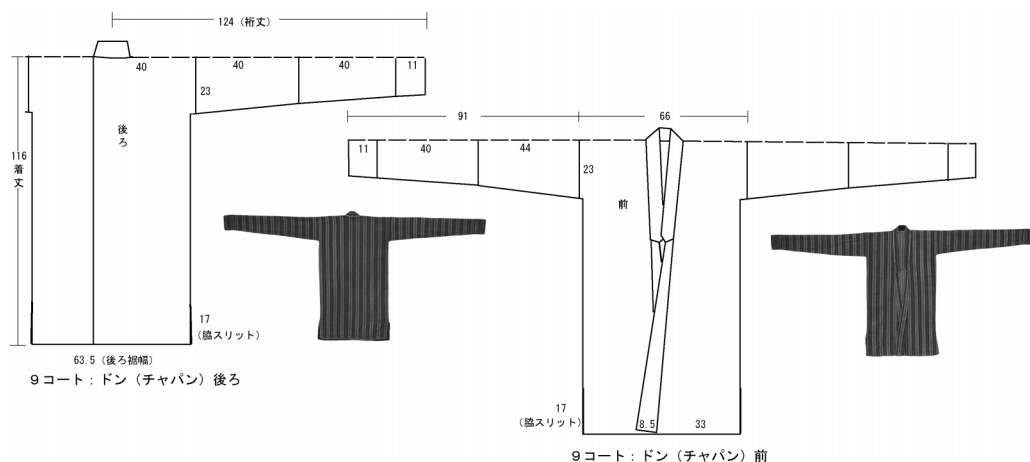


図9 資料9 アフガニスタン (文化学園服飾博物館所蔵)

いし、縫代は片返す。片返すことで縫い糸への負荷は減り縫い目はやや丈夫になる。衿は表身頃をのせ押え縫いでつける。裏布は綿、平織を使用し繊細な絹の表布を支え保形、補強の役目をする。表布と同じく並縫いし、縫代は片返す。袖口見返しには綿、平織の縞柄を使用、スリットが大きくあき、縞柄は動作で見える。装飾は開口部の縁飾りと刺繍。弧と三角を繰返す縁飾りは裏面から黒糸を渡しかがりつけている。縁飾りのラインに沿って1本の銀糸が止められる。開口部に金属糸をしっかり止め付けることで厚みと張りが増し、形が保たれている。

(9) 資料9 アフガニスタン；男子コート・ドン (図9)

日本の着物風コート。ウズベクの外衣チャパンの影響をうけチャパンとも呼ぶ。日常着は木綿縞柄、正装用は絹地で仕立てる。前開きで肩山を輪で前後の身頃を続けて裁断。筒袖は腕より長く、袖を通さず羽織る着方もする、和服風の衿がつく。羽織着のため前身幅が狭い。前後身頃 (前後を続けて裁つ)、衽、衿、袖からなる。5 cm 幅のきもの風な衿がつく。

縫製の殆どはミシン縫い。裏布は袷仕立てで、綿の平織がつく。開口部裏側にバイアス裁ちのコーデュロイの見返しをつけ、見返し端へ裏布が手まつりでつく処理方法である。衿と袖口はハードな芯を当てミシン刺繍で菱形模様が刺され硬く仕上がっている。細かな柄は正確さ

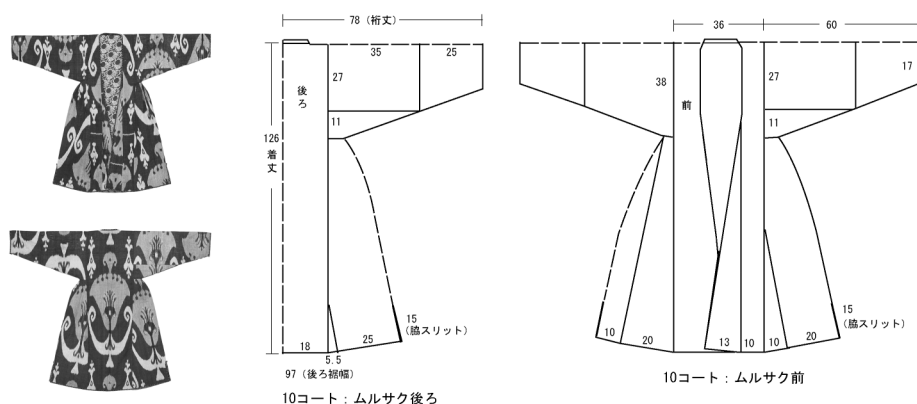


図10 資料10ウズベキスタン (文化学園服飾博物館所蔵)

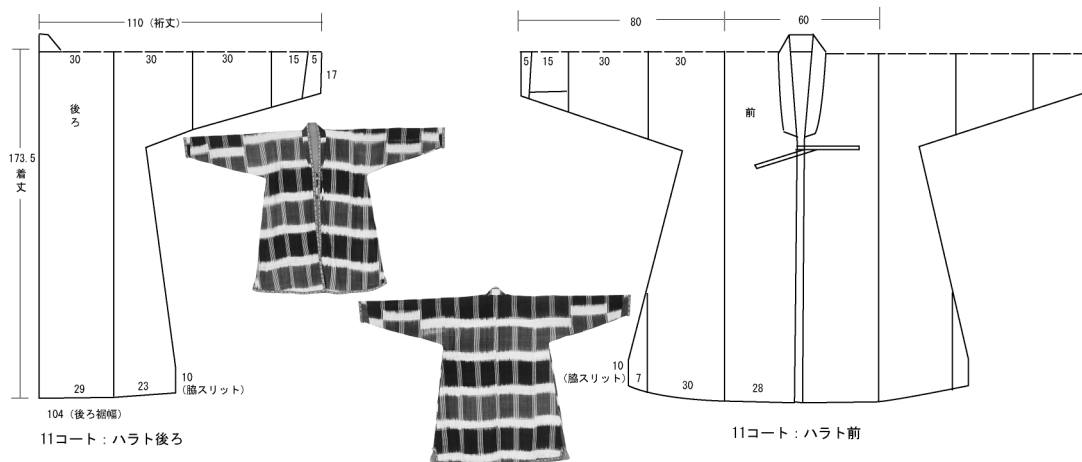


図11 資料11ウズベキスタン（文化学園服飾博物館所蔵）

と根気のいる作業である。衿の周囲を白と赤の毛糸で縁取り，続けて前端，裾，スリット，袖口も同じく縁取る。脇のスリットは17 cm あく。チャパンは乾熱の地域において防暑の役目を持つ。日差しを遮り過剰の発汗を抑制するため炎天下でも衿仕立てで，下衣には毛織物の冬のような服装^{わた}をしている。これは合理的な防暑服である。綿を入れ刺し縫いにする場合もある。

(10) 資料10 ウズベキスタン；女子コート・ムルサク（図10）

ドレスとパンツの上に着る。両脇袖下にタック3本寄せる。前合わせの胸あきが大きく前身頃の重なりは少ない。袖幅の広いゆったりした袖が付く。パルメットと呼ばれるシュロを扇状に広げたような植物文様を経糸であらわす。裏布はロシア更紗を使用。綿入れてあり温もりを感じる。前後身頃（前後を続けて裁つ），脇，裾，衿，袖，裾からなる。開口部の衿，前端，裾，スリット，袖口に藍と白の平紐の縁飾りがつく。後ろ衿0.8 cm に縁飾りが立つ。

縫製は全て手縫い。脇ウエスト位置で3本のタックが取られ，折山を巻き縫いで固定している。タックを取ることでベル・シルエットになり腰の丸みが女性らしい。脇裾には15 cm のスリットがあく。裏側に綿，裏打ち布，裏布が重ねられる。表裏を合わせた並縫いのとじが12 cm 間隔ではいる。綿入れである。開口部の

見返しには縦縞がバイアス裁ちでつけられる。装飾は縁飾り。前端，裾，スリット，袖口が0.8 cm 幅の刺繍で縁取られ，開口部が安定する。

(11) 資料11 ウズベキスタン；男子コート・ハラト（図11）

木綿の長いシャツと幅広のパンツ，ベルトを組み合わせて着る。身幅，袖幅の広いゆったりしたコート。ヘチマカラーがつく。衿付け止まりに紐がつき，合わせは左衽である。段模様の経糸は男性用に多くみられる。大胆な大柄である。前後身頃（前後を続けて裁つ），脇，裾，衿，袖，裾からなる。後ろ6.5 cm 幅，前4 cm 幅の衿がつく。脇スリット15 cm 開く。開口部の衿，前端，裾，スリット，袖口に5色使いの縁飾りがつく。

表作りはミシンで縫い合わされ縫代は割る。紐作りでの接ぎは手縫い，三つ折りにしてミシンステッチをかけている。裏作りは手縫い，表裏のとじ，紐付け，装飾付けも手縫いである。装飾は開口部の縁飾り。開口部は表布，裏布共出来上がりに折り，硬い芯をのせ縁飾りを止め付けている。表布と裏布は縫い合わせていない。表裏合わせのとじをしてから出来上がりに折り，縁飾りをつける時，縫い止まる。作業が正確に進められ合理的である。とじは身頃に6本，袖に左右4本ずつはいっている。

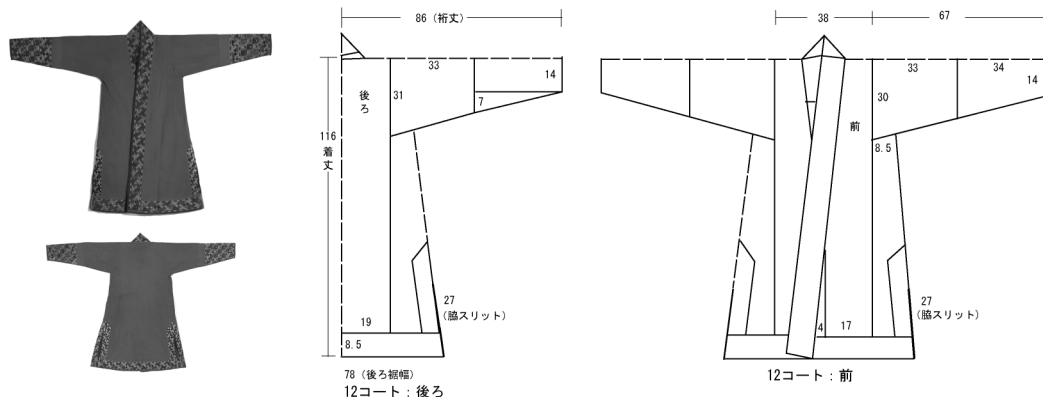


図12 資料12トルクメニスタン (文化学園服飾博物館所蔵)

(12) 資料12 トルクメニスタン；女子コート (図12)

トルクメン人の下位部族であるチョドール族の女性用コート。被衣としても使用される。開口部の幅広い花模様の刺繍が華やか。花模様は豊穡を表す。半纏風衿がつく。前後身頃（前後を続けて裁つ）、脇、裾、衿、袖、裾からなる。9.5 cm 幅の衿がつく。脇スリットは27 cm あく。衿、裾、スリット、袖口は幅広く切替えて刺繍される。チェーン・ステッチで4弁花文を刺す。さらに開口部はグリーンの糸で縁飾りをする。

縫製は全て手縫い。0.2～0.3 cm の針目で縫い合わせ縫代は0.4 cm に裁ち揃えて割り、左右の縫代端を0.6 cm 間隔で丁寧にかがり付け

ている。厚地の縫代を落ち着かせるための方法。縫代幅を細くすることで薄く仕上がる。縫代を縫いつけることで縫代が平らに安定する。裏地にロシア更紗を用い、見返しは経緋のバイアス布を使用し、開口部周囲を縁取る。裏布は並縫いをして縫代は片返す。縁飾り布はバイアス地の見返しを接いで使用する。縁飾りの刺繍部分は全て切替えになっており、刺繍が刺しやすく再利用し易い。仕立てでの工夫が見える。

(13) 資料13 ブータン；男子長衣・ゴ (図13)

袖幅の広い筒袖でヘチマカラー。身頃、脇、裾の裾幅を合わせると裾幅は338 cm にもなる。身幅の広いきもののような形状で、腰でおはしりをとり背面へ身頃のゆとり分をたたみ

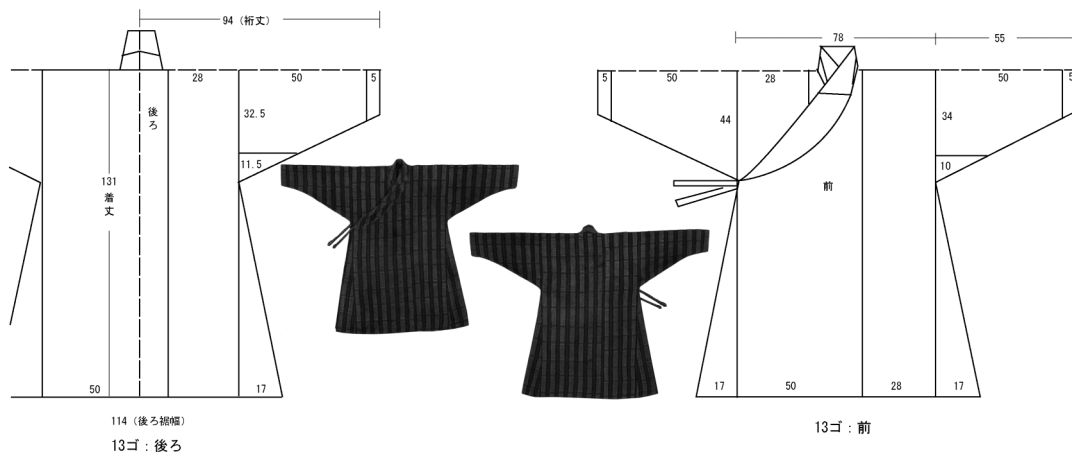


図13 資料13ブータン (文化学園服飾博物館所蔵)

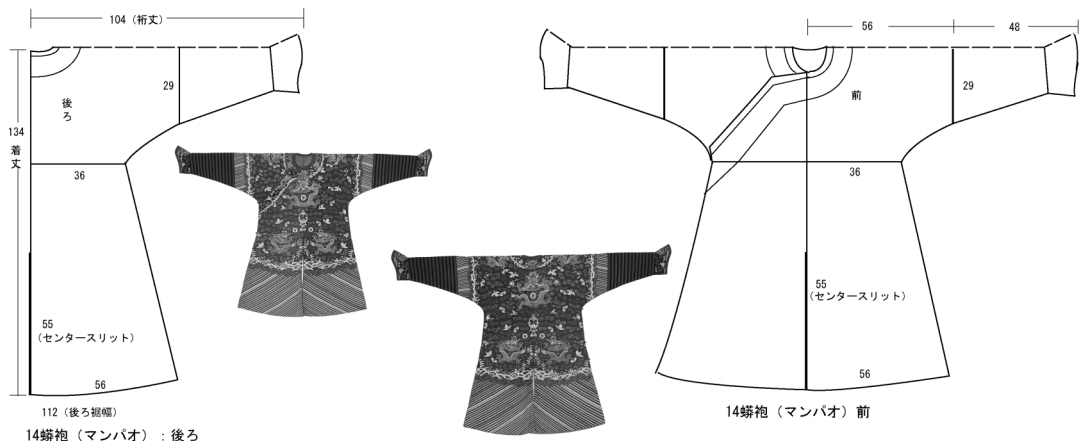


図14 資料14中国（文化学園服飾博物館所蔵）

箱褰のように合wash帯を締める。丈は膝上に着付ける。上半身はゆったりとして暖かく下半身はスカート状になり動き易い。許容範囲の広いフリーサイズであり合理的である。前後身頃（前後を続けて裁つ）、脇、衽、衿、袖、裾からなる。前の合わせは右衽で衿つけ止まりに紐がつく。16 cm 幅の衿は内側に折り着装する。現在も公式の場での着用が義務づけられている。

縫製は手縫い。裏側は綿で綾織のしっかりした裏布を用い、表布と縫い合わせ、開口部には明るいブルーの見返しをつける。布地が厚く大きく重いため製作は大変だと思われる。

(14) 資料14 中国；男子長衣・蟒袍マンパオ（図14）

蟒袍（マンパオ）は龍の文様を施した官吏の吉服の名称である。吉服とは朝服に次ぐ儀式用の衣装で、身分、階級によって龍の数や爪の数、地色や刺繍の色まで異なる。また、皇帝以外の臣下のものは龍の字に代わって蟒（うわばみの意）の字を当て、蟒袍：マンパオとよんで皇帝の用いる龍袍：ロンパオと区別した。龍の回りを飛ぶ鶴の模様から文官一品の袍と考えられる。吉祥文様は綴織で織り出されている。袍はゆったりした衣服をさす。右側に合わせ目があり、胸で38 cm、裾で56 cm と重なりは深い。右衽で5個の金属釦は紐のループで留められる。肩先位置での袖の深さは45 cm あ

り、ゆるやかである。腰帯を締めて着用する。春秋用である。前後身頃（前後を続けて裁つ）、衽、袖からなる。

縫製は全て手縫い。前後中心を縫い、割る。次にウエストの切替えを縫い、割る。袖をつけ縫代は片返す。袖口布をつけ袖下から脇を縫う。衿ぐりに0.5 cm 幅の別布のパイピングがつく。衿ぐり、衽上端、袖口は2 cm 幅のパイアス別布でトリミングされ、なだらかなカーブがしっかり形作られている。前後中心の縫い目に55 cm のスリットがあき、門止めがされている。裏側は薄地の絹を袷仕立てで使用。装飾は衿ぐりのパイピング。衿ぐり、衽上端、袖口の縁取り。龍の目に刺繍。細かな針目で丁寧に製作されている。

3. ボディー着装による観察

着装状態の観察より、衿ぐりのフィット性については縁飾りでの補強が伸び止めとなり端が安定することで、衿ぐりはボディーによくなじんでいる。着装シルエットは資料1, 3, 4, 7はストレート、資料2, 8, 9, 12はAライン、資料10はベル型、資料13は着装でブルゾンにする。資料5, 6は着装不可であった。前開き型衣服は着脱が簡単で、ゆったりした形状は許容範囲が広く、中着の重ねにも対応する。着方に特徴のある資料4, 5, 8は、前裾を持ち上げて

装する。裾を上げることでより華やかに、機能的になる。資料13は長い着丈を膝まであげ、余分はおはしより風に腰にたたみ、ブラウジングさせる、身幅の余りは後ろに箱襷をとる。着装でスカート状になった下半身は歩行が自由になり、上半身はゆったりとし暖かく、たたみ分は帯を取らず袖を脱ぐことを可能にし、物入れの役目も果たす。物を入れることで衿は衿ぐりに落ち着く。左衿先の紐が着崩れを防ぐ。

Ⅳ ま と め

文化学園服飾博物館所蔵の実物資料、アジアの民族服、前開き型長衣14点の調査研究より次の結果を得た。

① 素材

資料14点の表布の素材は絹100%が6点、経糸絹、緯糸綿は3点、綿100%は3点、麻100%は1点、毛100%1点であった。裏布の素材は綿100%10点、絹100%3点、麻100%1点であった。裏布が絹は資料6シリア女子コート、資料11ウズベキスタン男子コート、ハマト、資料14中国男子長衣蟒袍マンパオの3点で表布、裏布共に絹の衣装は高貴な身分用に使用されている。

資料14点で衣服重量が最も重いものは資料13のボタン男子長衣ゴで2,980g、軽いものは、資料7のイラク女子コートで691gとゴの1/4以下であった。

② 形状、パターン

資料に共通する形状、構成は前開き型で直線裁ちの平面構成である。袖は筒袖で袖ぐりの深い筒袖が5点。袖下脇に襷をつけて袖ぐりの深さを確保し機能性を持たせた筒袖が8点。襷が無く袖は細く長い男子コート、ドンでは、手を通さず羽織る着方もされた。衿は立衿、ヘチマカラー、半纏衿、和服風衿がみられた。襷、の付くものは12点、衽の付くものは11点みられた。襷衽をつけて運動量を加え、Aラインのシルエットを構成している。直線裁ちで

平面構成の衣服に機能量を加える方法として襷は有効で必須である。身頃脇又は中心線にスリットあきのあるものは12点あり、脇スリットは日常の動作への機能量となり、装飾にもなっている。袖下にスリットあきのあるものは5点見られた。シリアの2点は着装で前裾を帯に挟み裏側の装飾を見せている。

③ 縫製方法、装飾技法、裏側の処理

資料14点の内11点が全て手縫い、1点が全てミシン縫い、2点はミシンと手縫い併用であった。並縫い、半返し縫い、本返し縫い、巻き縫い、折り伏せてまつる、門等多様な手縫いの技法が見られた。装飾技法は縁飾り、アップリケ、刺繍、絞り染め、装飾テープ、キルティングが見られた。衿の裏の始末は表裏2枚を前端で出来上がりに折り、別布バイアス地の見返しを上へのせ、付ける仕立てが特徴的であることが確認出来た。裏側も縁取りされ美しい。同時に開口部端は布地が6枚重なり更に縁飾りがつき、厚みと張りを増して形状を安定させていることが分った。

④ ボディー着装による観察

縁飾りが伸び止めとなり、開口部端が安定し、衿ぐりのフィット性もよい。シルエットはストレート、Aライン、ベル型、着装でブルゾンに着付ける等の方法が見られた。調査結果を、西から順に並べてみると、形状についての流れや境界線が見えて興味深い。今後も引き続き調査を継続したいと考える。

本研究の調査にご指導ご協力下さいました文化学園服飾博物館学芸室長植木淑子氏、並びに学芸員吉村紅花氏に深く感謝申し上げます。

参 考 文 献

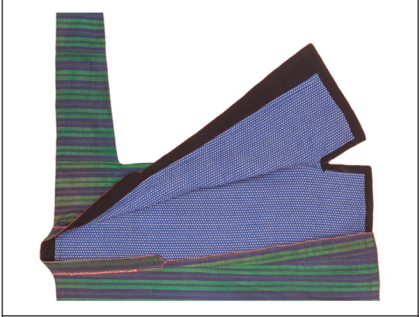
- 1) 小川安朗『世界民族服飾集成』文化出版局、1991、p. 22
- 2) 田村照子、道明三保子『アジアの風土と服飾文化』日本放送出版協会、2004
- 3) 文化学園服飾博物館編『西アジア・中央アジアの民族服飾』文化出版局、2006



図15 衿，縁飾り



資料 1



資料 9



資料 5



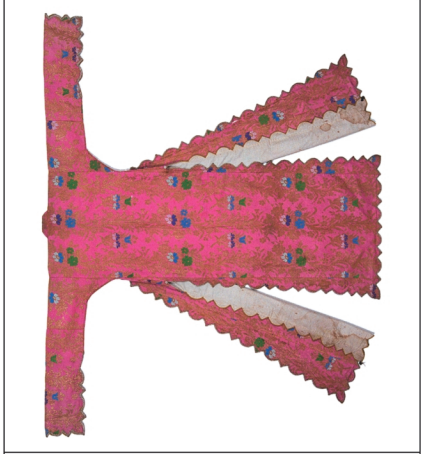
資料 7



資料 4



資料 12



資料 8



資料 14

図16 裏側